

〔巻頭言〕

長谷川拓三教授追悼論文集の刊行にあたって

学長 渡 邊 泉

長谷川拓三さんと始めて会ったのは、1994年の夏草が繁り始めた頃であったと記憶している。本学の原価計算論を担当されていた故松本剛先生の後任として本学にお迎えする話が具体的になった時のことである。年齢は私よりも下であったが、一見茫洋とした風貌は、その人柄の大きさをいやが上でも感じさせた。専門は異なったが、財務会計にも造詣が深い人だと感じたのが第一印象であった。

慶応大学で簿記学会が開催された1995年（平成7年）10月28・29日に、準備委員長の笠井昭次教授から統一論題でキャッシュ・フロー計算書の歴史の報告をして欲しいとの依頼を受け、その準備のためにいくつかの資料をあたっていた頃のことだった。御所の新緑が深くなる頃であったろうか。高寺貞男先生から「キャッシュ・フローの報告をする若い君がいるので、一度聞いてやってくれないか」と研究会へのお誘いを受けた。京都会計研究会に参加したのは、この時が最初であった。

この研究会は、もう半世紀以上も前に、すでに故人になられた宮上一男（大阪市立大学）、岡部利良（京都大学）、小島男佐夫（関西学院大学）各先生や今も矍鑠としてご健在である中村萬次先生（神戸商科大学）等を中心に、多くの同学の志が集って始められた。その後、発足時の中心メンバーの中では、岡部利良先生だけが残り、岡部先生をコアに継承されたと聞いている。先生が亡くなられた後は、高寺貞男先生（京都大学、大阪経済大学）や長谷川さんの恩師である故河合信雄先生（立命館大学、京都経済短期大学）によって引き継がれた。現在は、高寺貞男先生をコアに中居文治（京都大学、福井県立大学）、松村勝弘（立命館大学）、上総康行（京都大学）、松本敏史（同志社大学）、藤井秀樹（京都大学）各先生を中心メンバーに、多くの研究者が大学院生も含めて集って、辛辣な批判を常とした報告会が毎月開催されている。

もちろん、長谷川さんもこの研究会の主要メンバーの一人であった。研究に対する

ひたむきで真摯な彼の研究姿勢は、「京都会計研の見識」といわれ、それほど口数の多い方ではなかったが、するどい切り口の質問やコメントは、普段の温厚な人柄とは別人のような厳しさを感じさせることもあった。大きく呑みこんでくれる穏やかな人柄と学問に対する厳しい姿勢が多く、若手研究者から慕われていた要因であろう。厳しいだけではなく、相手の立場に立って、いつも一緒に悩み、考える優しい心遣いがきつとそうさせたのではなかろうか。研究会の始まる前に、何度か四条河原町の高島屋で待ち合わせ、筆者の恩師小島男佐夫先生に連れて行って頂いた寿司屋「ひさご」で昼食と一緒に食べたのが、懐かしく想い出される。なぜかいつも、冬は、蒸し寿司と茶碗蒸であった。

私も彼に ABC, EVA あるいは TOC やスループット等彼の専門に近い新しい問題が出てくるたびによく訊ねて、教えてもらったことを思い出す。彼からも「泉さん、稲盛和夫の『実学』読みました?」とか「ガーナーもう一度読み直そうと思ってるんです」とか、今になってはたわいのない会話だったが、とても懐かしい。彼の研究に対する真摯な取り組みは、校務の多忙を言い訳に、時としてさぼり勝ちになってしまう私の日常に無言の叱咤と激励を与えてくれていた。皆から愛され、信頼されていたのも頷けるところである。

彼は、その専門がドイツの原価計算であるということもあり、単に読み書きだけではなく、会話の方も不自由なくネイティブの人達とも意思疎通出来るほど、ドイツ語は極めて堪能であった。いつの頃であったろうか。もう 6, 7 年程前のことになるが、拙著『決算会計史論』（森山書店、1993）のドイツ語概要を作成した時、誰かネイティブの人にチェックをしてもらわなければならないと思っていた。その矢先、彼の友人が彼を訪ねてドイツから日本にやってくるとの話を聞き、研究室でチェックしてもらったのを思い出す。生業としている翻訳家に依頼すればそれで済むことであったかも知れないが、会計を知らない人にチェックを頼むのは、余りにも不安で、もしできれば、内容を説明しながら確認をしたいと希望していた。そのドイツからの訪問者に、私はドイツ語まじりの下手な英語で、ああでもない、こうでもないと説明した。それに対して長谷川さんは、極めて流暢なドイツ語で私の説明のフォローしながら、2 時間以上も付き合ってくれた。随分助かったと記憶しているが、彼にはさぞかし迷惑なことではなかったろうか。

1999 年（平成 11 年）3 月に富田の高槻赤十字病院で大腸癌の手術を受けられ、本学

の渡辺大介教授と一緒にお見舞いに行った。点滴の器具を押しながら、待合室でしばらく話をした。医者から癌の告知を受けたこと、昨夏から腹部に痛みを覚えて検査を受けなければと思っていたのだが延び延びになっていたこと、等を話された。その後の再入院や最後の入院に際しても、渡辺大介氏は、何度もお見舞いに行かれたが、残念ながら私は、この時だけで、再び病院にお見舞いに行くことが出来なかった。摘出手術がうまくいったのと、とても良い顔色と3週間程度で退院出来たのを見て、よもやその年の11月に再入院が待っていようとは、想像だにしなかった。しなくなかったのかも知れない。家内が門戸厄神にお参りしてもらってきたお守りを手渡したとき、「ありがとうございます」とにこっと笑って受取ってくれた彼の優しい顔が今も忘れられない。そして、最後に会ったのは、2001年9月16日(日)の告別式の時であった。

2000年の夏に奥様と一緒にポーランドのアウシュビッツに行くと言った時も、「何でそんな所に」と何となく合点のいかない漠然とした不安を感じていた。これも後になって奥様から聞かされたことであるが、本人のたつての希望で、彼が使っていた抗癌剤の薬の原点がアウシュビッツにあるのではないかということで、出掛けられたそうである。彼や奥様の心情を察すると、全く言葉をなくしてしまう。

通常の追悼の辞とは、前後するかも知れないが、長谷川拓三教授の略歴と業績を紹介し、彼の研究者としての足跡を辿っておきたい。

長谷川拓三氏は、1947年(昭和22年)に大阪の地で誕生され、地元の小、中、高等学校を卒業後、立命館大学経営学部に進学、河合信雄先生のゼミで会計学の勉強を志した。1973年3月同大学を卒業と同時に株式会社東京教育情報センターに入社したが、仕事の関係もあったのか、研究への想いを捨てがたく、同社を1975年8月で退社、翌1976年4月に明治大学大学院商学研究科博士前期課程に入学し、松尾憲橋先生に師事した。1978年4月に後期課程に進学、1983年に同研究科同課程を満期退学と同時に、愛知女子短期大学に奉職された。研究生生活のスタートである。当初は、財務会計論と簿記論を担当されていたが、1986年に岐阜経済大学経済学部で管理会計と簿記原理の担当として移籍された。その間、1992年4月から翌年3月まで、ドイツのシュトゥットガルト大学に客員教授として1年間留学された。彼の堪能なドイツ語力は、この留学中に更に磨きがかかったのであろう。留学後も毎夏のようにドイツに出掛け、奥様の言葉によれば、いつも新鮮な空気を家庭に運んでくれたとのことである。

本学には、1995年(平成7年)4月に原価計算論、会計基礎論担当の経営学部教授

としてお迎えした。誠に強力な相棒を得て、どれだけ心強い思いをしていたことか……。

彼の研究成果は、やはりドイツ原価計算のとりわけ学説史的な分野で極めてこつこつと余り派手さはないが、玄人好みの緻密な研究に裏づけされたものであった。初期の段階では、ドイツ経営経済学の視点から、S.フントやE.シュマーレンバッハの所説の分析を通して、批判的合理主義の立場から現代会計学の意義の再検討に取り組んだ。いわば、ドイツ経営経済学の現代的意義とでもいった分析である。その後は、リーベルの原価計算を取り上げ、1986年に松村勝弘編『アメリカ・ドイツ企業会計史研究』（ミネルヴァ書房）の第8章で「リーベル部分原価計算システムの特徴」を執筆された。就職後も引き続き、「標準原価思考の生成」、「西ドイツ鉄鋼業の展開と固定費の作用」、「西ドイツにおける企業コントロールリングの展開」、「共同決定の影響下での戦略的計画設定」、「原価企画の特徴と本源的機能の考察」、「西ドイツにおける戦略的原価マネジメントの構想について」等、主として西ドイツにおける原価計算の発展過程に焦点を当てて研究されてきた。独文による論文も公表され、とりわけ、1994年1－2月の *Zeitschrift: "Controlling"* に掲載された "Entwicklung des Management Accounting Systems und Management Organisation in japanischen Unternehmen" は、管理会計の同学の志だけではなく、広く財務会計を専攻している人達からも大きな注目を浴びた論稿であった。

長谷川さんが最も敬愛し師事していたのが高寺貞男先生であつた。その高寺先生は、いつも研究会の席上、「社会科学は、50才を過ぎないとわからない」と言われている。長谷川さんは、まさしくこれから会計学が本当の意味で分かってくるときに急逝された。享年53才。どんなに口惜しい想いであつたか、言葉もない。今はただ、たい子夫人、ご子息とも大きな悲しみを乗り越えて強く生きようと心に誓っておられることを君に伝え、この追悼論文集を墓前に捧げる。どうぞ、安らかにお休み下さい。（合掌）